6/3岐阜新聞

河口堰30年、環境観察会
長良川「カニ減少」
参加者ら揖斐川と比較

ヨシ原で捕らえたカニを観察する参加者＝三重県桑名市長島町、揖斐川

三重県桑名市長島町の長良川河口堰の周辺で1日、「長良川下流域環境観察会」が開かれ、参加者約30人が汽水域のある木曽・揖斐川と堰が設けられた長良川の生き物の生息数や景観を比較し、来月で運用開始から30年になる河口堰の生態系への影響を考えた。

参加者は河口堰の管理橋の上から調節ゲート、魚道などを見学した後、上流部へ。大部分のヨシ原が失われた長良川と背割り堤を挟んだ揖斐川で各3分間、ベンケイガニなど小型のカニを採集したところ、長良川4匹、揖斐川87匹と大差がついた。

案内役の長良川下流域生物相調査団の元団員千藤克彦さん(64)＝岐阜市＝は「河口堰で干満がなくなってヨシ原は激減し、（海水と淡水が交じる）汽水域でしか生きられないカニもいなくなった。ちょっと調べただけでも生物多様性が失われている」と説いた。

観察会は岐阜、愛知県などの市民団体でつくる「よみがえれ長良川実行委員会」が、「なごや環境大学」の講座の一環で開催。舟からの川底の堆積物調査は強風のため中止になった。

（堀尚人）

長良川河口堰、考えるシンポ
完成30年 岐阜で来月6日開催

長良川河口堰の管理橋の上で説明を聞く環境観察会参加者たち＝1日、三重県桑名市

全国的な反対運動を押し切り、国が1995年に完成させた長良川河口堰（三重県桑名市）をめぐり、市民グループ「よみがえれ長良川実行委員会」が、河口堰の運用見直しを求め、活動を続けている。6月1日には現地で自然観察会を開き、30年前にゲートが下ろされた7月6日、岐阜市でシンポジウムを開く。

長良川への海水の俎上をせき止める河口堰は、都市用水の取水と洪水対策のため計画されたが、着工前から愛知、三重両県の水需要などが低迷。一方で、生物豊かな河口の汽水域を分断するため環境派を中心に大きな議論を呼んだ。

2011年以来、愛知県が設置した専門家の委員会がゲートを部分開放して汽水域をつくり生態系回復につなげられないか、検討を続けている。

1日の観察会は約30人が参加。強風のため船上からの観察はとりやめたが、管理橋や魚道を見学。かつては鳥や昆虫、魚のすみかだったが、河口堰運用後に激減した川岸のヨシ原付近もみた。

建設段階から反対運動にかかわる同実行委共同代表の粕谷志郎・岐阜大名誉教授(76)が、「流れを遮られ、堰の下流にはヘドロがたまった。隣の揖斐川の砂地と対照的だ」などと説明した。

シンポジウムは、河口堰の歴史をふり返り、海外の事例も紹介する。運用開始時の旧水資源開発公団所長や東大院教授らが話し合う。7月6日午後1時から岐阜県図書館。入場料500円。問い合わせは同実行委の武藤さん(090・1284・1298)。（伊藤智章）

6/5朝日新聞